



害虫の慰霊祭

昆虫の忠魂に感謝



殺虫剤メーカーのトップたちは、虫の霊を慰めるため深く頭を垂れ、巫女は舞った—大阪市北区、滝沢美穂子撮影

「被いたまえー 浄めたまえー」
神主の朗々とした声が響き、11人の参列者が頭を垂れた。新春10日、大阪市北区のホテルでとりおこなわれた慰霊祭。慰められる霊魂の主はハエ、蚊、ゴキブリ、ダニといった害虫たちである。

一人祭壇に進み出て玉串を捧げた。た名だたる殺虫剤メーカーの社長や重役たちが列席し、お神酒や餅、尾頭付きのタイ、果物が供えられた祭壇に神主が祝詞を奏上する。神道独特の口調と文体で述べられる内容を要約すれば、こんな意味だ。

「ここに並ぶ人たちは、人間生活の利便のため虫退治の仕事に励んできました。しかし虫にも魂があり、仕事のはいえこれを殺すこと、ものの哀れを知る人にとってやるせないことでもあります。ですから神様から「くなくなった虫たちに、安らかに眠るように指導をお願いします」祝詞が終わると巫女が舞い、一人

一人祭壇に進み出て玉串を捧げた。的な成分が含まれていた。戦後はその成分を科学的に合成し、虫の種類や社会のニーズに合わせて工夫が加えられてきた。

「私たちはある意味、虫にお世話になっている。虫が棲めない世界では人間も暮らせないわけで、自然環境を壊すことなく快適な生活ができるよう殺虫剤をつくっている。その思いを、新年を迎えて改めて確認するのがこの慰霊祭です」。主催者の日本家庭用殺虫剤工業会の会長で大日本除虫菊社長の上山直英さん(61)は言う。

同会が初めて慰霊祭を開いたのは1973年。以後、毎年正月に開催している。会場が大阪なのは、関西など西日本に拠点を置くメーカーが多いためだ。大日本除虫菊は創業者が和歌山県出身で大阪に本社を置く。アース製薬は大阪で創業し兵庫県赤穂市に工場を建て、フマキラーは広島で創業した。明治以来、殺虫剤に使用していた除虫菊を、和歌山県や瀬戸内海沿岸で栽培していたことが背景にある。

除虫菊には虫に効いて人体に害を与えないという、殺虫剤として理想



絵・グレゴリ青山



朝日新聞大阪本社
発行所：〒530-8211 大阪市北区中之島2-3-18 電話：06-6231-0131
www.asahi.com

2013年(平成25年)
1月16日
水曜日

夕刊

ますます勝手に 関西遺産

虫慰霊祭
日本家庭用殺虫剤工業会

快適な人間生活のため退治される虫たち。すまぬ。安らかに眠ってくれ。殺虫剤業界トップたちは毎年大阪で慰霊祭を開く。 3面